

この下方に今地院崇伝の印が捺されているところから、この3幅が戦国期末・江戸初期に名高い今地院崇伝が所蔵していたことがわかる。そのことから考えると、表装に三つ葉葵文金襴の布が使われているのが理解できようというものである。ひょっとして徳川家康が所持していたものが、崇伝に下賜されたものではないかと想像をたくましくすることもできる。

また、「十六羅漢と伝える」とあるから、ひょっとしてもともと4幅対の掛け軸であったのではないかと考えられる。さらに、納められている箱の蓋裏に墨書があり、それには「正徳三年巳年吉日 表具功畢」とある。正徳3年は西暦1713年にあたる。



ところで、羅漢とは、阿羅漢の略であるが、どのような人を云うのであろうか。仏教では釈迦が入滅したあと、100年も経たないうちに、保守派と改革派の対立により、上座部（小乗仏教）と大乘部（大乘仏教）の二つに大きく分裂した。その後、上座部は東南アジア方面へ、大乘仏教は中央アジアを經由して中国・朝鮮・日本へと伝播して行った。

ゴータマ・シッダルタは悟りを得て、ブッダ（釈迦）となって解脱したが、それを超えて民衆に布教することが必要だと考えた。すなわち絶対的な力を持つ如来や菩薩による民衆の救済を重視したのである。

このように他者の救済を欠かせないとしたのが、大乘仏教である。これに対して上座部仏教は、最高の悟りに達した聖者のことを阿羅漢と言い、自分の解脱に努力し、自利を求めることを最終目標とした。

参考文献 『仏教入門』（保坂俊司監修）2010年初版。（文責 藤重 豊）